



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	ICT利用の外国語学習について : Facebook/Skype/Video会議システム等を利用した日独タンDEM授業
Author(s)	吉井, 巧一
Citation	琉球大学欧米文化論集 = Ryudai Review of Euro-American Studies(61): 115-124
Issue Date	2017-03-15
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/36692
Rights	

ICT 利用の外国語学習について —Facebook/Skype/Video 会議システム等を利用した 日独タンデム授業—

吉井巧一

1. 構想・経緯

外国語学習の学習目標として「コミュニケーション能力」の育成を重視するならば、また所謂コミュニケーションツールとしてその言語を十分に「運用する能力」を獲得することを目的とするならば、外国語の構造（文法）を「理解・暗記」するだけではなく、多種多様な（できる限り実践的な）「練習」の機会が必要不可欠であろう。もし、当該外国語の（同年齢、即ち似通った嗜好・興味を持つであろう）母語話者と、「いつでも、どこでも、個別に」会話練習ができる機会があれば、外国語学習への強い動機付けの一つとして極めて有効であろう。教室内での一般的な「擬似体験」としてのパートナー練習やロールプレイ等では不可能な、「本物」のみが持つ緊張感・達成感を得るには、これまでは、時間と費用の面で一部の学習者にのみしか開かれていなかった「海外留学」、或いは母語話者による「個別指導」等の方法しかチャンスはなかった。また、「ペンフレンド」・「交換日記」等の古典的とも言える、時間と忍耐力が不可欠な（且つ音声手段以外の）学習法が、現代の一般的外国語学習者に広く受容されることも考え難い。

以下に紹介する、「ICTを活用した、外国語による表現力育成を主眼においた学習法」の構想を筆者が得るに至った経緯は、友人のドイツ・デュッセルドルフ大学日本語学科教員であった H 氏との意見交換¹であった。日本語・日本文化に興味を持ち、日本語会話の練習機会を求めているドイツ人学習者と、正に

その裏返しである、日本の大学でドイツ語・ドイツ文化を学ぶ日本人学習者の交流の場を設定すれば、両者にとって極めて有意義な練習機会となり、更に活発な異文化交流が実現できるはずである。当時²既に、「Skype」を利用すれば、高価な設備や特殊な技術がなくとも、(後述するように、必ずしも十分とは言えなくとも) 実用に耐えうる日独間のコミュニケーション環境が実現できたことは幸いであった。更に、二言語併用という「タンデム学習」方式により、各々の学習者の言語的負担が軽減できたことも幸運であった。

また、所謂文化的言語外情報(身振り手振り等のノンバーバルコミュニケーション手段、当該文化圏のアップデートな基本情報等)の収集という観点からも、従来一般的な教科書やドリル練習教材とは異なり、マルチメディアを駆使した学習環境が果たす役割は極めて大きい。次にその具体的な授業方法を紹介する。

2. 授業方法 (概要)

ドイツの大学の日本語・日本文化専攻学生と、琉球大学でドイツ語を学習する学生が、インターネット経由でテレビ会議システムや Skype、チャット、Facebook³等を利用して、リアルタイムで実践的な日独語会話練習を行う。

目的：外国語実践練習の機会提供及び異文化交流の促進

効果：実践的会話力の向上及び学習モチベーションの向上

次に、具体的な授業の流れを簡単に概観する：

- 日独で参加希望者の募集(各学期、開始直後)
- 参加者リスト(メールアドレス・Facebook/Skype名・趣味等)作成
- 初回授業(全員でビデオ会議)にて自己紹介
発表及び会話練習のためのテーマ選定(資料1参照)
- 発表内容の準備(資料収集・メモ作成・発音練習等)
- 第1回 Skype 実施(各自時間調整後、毎回異なるパートナーと自由時間内に⁴)

- (Skype 実施後 1 週間以内に) 話した概要を各学習言語 (ドイツ語の場合 200~300 語程度) で Facebook に投稿 (資料 2 参照)
- (できるだけ早く) パートナーが書いた概要の添削・再投稿 (資料 3 参照)
- その他、Skype 活動以外に、お互いに相手が興味・関心を持ちそうな情報を、随時 Facebook に投稿、紹介する⁵ (資料 4 参照)
- 以下、同様に第 2 回 Skype 実施準備へ

なお、Skype 実施中は、文法その他形式にとらわれず自由な会話のやり取りを「楽しむ⁶」ことに重点を置き、その後話した概要を記述する際に、文法はもちろんのこと、学習言語の表現形式や文化的側面にもできる限り配慮することを求めている。ただし、添削には教員が一切関与しない。すべて相手側パートナーの裁量に任せ、完璧な作文を追求しないことをドイツ側とも相互に確認している。この点は、参加者の精神的負担の軽減に大いに寄与しているのではないか。上述したような学習目標設定に於いて、言語運用の「完璧さ」を求めるとの無意味さを、ここで改めて論じる必要もなからう。

3. 利点と問題点

既述の通り、この学習法の最大の利点は「実践的」及び「学習者中心」であるということに尽きる。ICT を活用することで「時間と空間」を超え、実践的な語学練習が実現できる。また、学習のイニシアチブは学習者にある。テーマを決め、内容をまとめ、時間を決め、結果を出すことは全て学習者に委ねられている。各自の自主性・自律性が前提であり、「教員中心」の受動的学習から脱却した積極的・創造的な学習への「コミットメント」が求められる。授業評価アンケート⁷からも窺えるように、このように自分自身の裁量で学習を「コントロール」出来ることが、能動的学習へと繋がっていく。もっと相手との「コミュニケーションを楽しみたい」、自分の意見をより「的確に表現したい」という自発的な欲求がなければ、上辺だけの練習に終始し、結局何も身につかないということではなからうか⁸。

ここで是非言及しておくべきは、教員の役目は、あくまで「コーディネーター」として学習過程全般を統括しながら、後述するようなトラブル・停滞が発生しないように（或いは、起こってしまった場合は、速やかに必要な修正や補助を行えるように）絶えず全体に注意を向けておくことである。例えば、

技術的トラブル：各種機器の取り扱い、設定方法、Facebook・Skypeへの登録、ドイツ語特殊文字のタイピング等、トラブルの種類は毎学期多岐にわたる。技術職員の補助があれば大方の問題は解決するが、トラブルは往々にして突然起こるものである。

内容の調整：「テーマ選定」も学生の裁量に任せていると既述したが、文化交流的に見て不適切なテーマ（政治・宗教等にかかわる個人的意見）、会話に発展性があまり見込めなさそうなテーマ（食べ物の嗜好・偏った趣味・ペット等）は、排除はせずとも、教員がそれとなく逸らすようにしている。これまでに双方の会話が盛り上がったテーマとしては、「将来の夢（仕事・家庭生活・余暇）」、「一ヶ月の生活費（収入と支出・娯楽費・アルバイト）」、「それぞれの出身地の観光案内・旅行プラン作成」等が挙げられる。

言語的補助：「会話を楽しむ」、「必要な内容を伝える」、この両者の折り合いをどう付けるかが肝心である。結論を言えば、「小事を捨て大事を取る」ことであろうか。具体的には、（ドイツ語文法で特に重要な）「文型」を常に意識させること、及び「格」と「前置詞」に注意することを徹底して訓練することになる。また、忘れてならない重要項目として「発音（個々の単語レベルではなく、文として自然な抑揚・リズム等）」の練習も不可欠である。用意周到な準備にも拘わらず、不十分・不適切な発音のため、会話が成立しないこともある。

円滑な進行：様々なタイプの学習者が各自のリズムで学習を進めていく過程には、当然、「行き違い・停滞・誤解等」が生じる。適宜臨機応変なアドバイス・援助・確認等が必要となる。

事後学習：本学習形態の恐らく最も重要なポイントと言ってよい。話した内容を内省的に整理し、収集した資料も活用しながら、単なる独作文ではなく、まとまりのあるレポートを学習言語で書き上げること。このような作業に

よってこそ、生きた表現能力が培われる。そこに同世代のコメントや添削が加われば、学習意欲が倍增するのも頷けるであろう。

4. 総括・展望

以上概観したように、「ICTを活用する実践的な語学練習」は、外国語学習法の選択肢の一つとして、従来の枠を超えた、能動的且つ創造的な語学力修得の機会を提供するものである。学習者一人ひとりの興味や学習方略は正に千差万別である。それぞれの進め方（方法・テンポ）で、自分の興味に沿った学習内容をもとに実践的・能動的な外国語運用能力を高め、更に、相手側の興味や事情とも比較対照しながら知識や視野を広げる。そのような外国語学習は、国際的な異文化交流の場で活躍できる人材を育成するという、正に今外国語教育が求められている時代の要請にも充分応えられうるチャレンジと言えるのではなかろうか。様々な言語学習や教育活動の場が、生き生きと活気溢れた楽しい時間となり、相互交流が益々盛んとなり、世界平和の実現に向けて一歩ずつ共に歩んでいくこと、それが外国語学習本来の目標に適った姿であろう。

本実践報告が、外国語学習を自己目的の呪縛から解き放ち、決められた教科書や教員からの一方的、単一的な指導から離れ、自由な言語活動へと導く一助になれば、また外国語教育担当者相互の意見・情報交換の契機になれば、それこそ筆者の望外の喜びである。

5. 註

1 H氏のドイツ・ライプツィヒ大学への転勤に伴って、現在は同大の日本語専攻学生を交流パートナーとしている。氏の全面的な協力・援助がなければ、このような企画は成立しなかった。改めて、心より厚く御礼申し上げる。なお、ドイツ側の参加者は全て自由参加であり、特に講義としての単位認定等は行っていない。

2 交流開始時期は2009年10月、その後年度・学期によってバラツキはあるが、双方5～10名程度の参加者という規模での実施が多い。

3 個人情報保護の観点から、Facebook/Skype のグループ作成機能を利用している。従って、公開ではなく参加者のみがアクセス可能である。

4 お気づきのように、如何にして最適なタンデム学習パートナーを探すかが、このような学習形態を実施する際の一番の困難かもしれない。交流協定校や教員のネットワークを通じて、信頼できるパートナーの確保に務めるしかない。

5 日独間では時差が大きい（夏 7 時間・冬 8 時間）、講義時間内での一斉交流はほぼ不可能である。また、各自話す内容・都合の良い時間帯は異なるので、寧ろ授業外活動として個別に実施する方が良い。

6 見つけた情報を各自が自由に投稿することもあるが、日本側参加者のほぼ全員が並行して受講中の「ドイツ研究 A・B」（現代ドイツ文化に関わるテキストの講読授業）で講読中の記事の翻訳を、順番に投稿・紹介することが多い。

7 学期毎の授業評価アンケートから：

「良かったところ：自分のペースで進められた。」

「最初は会話が不安だったが、楽しくおしゃべりできてほっとした。」

「ドイツのパートナーが日本に興味を持ってくれるのが嬉しかった。」

「ドイツ人の考え方や興味が分かった。」「ドイツ人の生活が知れて、とても楽しかった。」 etc.

8 タンデム学習とはいえ、彼我の語学力の差が大きい場合、どうしても有力な言語による会話を中心にしやすい。そのため、各々 20 分程度はそれぞれの言語のみを使用する（少なくとも努力する）という条件を課している。

しかし、主要目的は会話・コミュニケーションを楽しむという点に置いているので、厳密なチェックをしているわけではない。話しがはずめば、2 時間以上もおしゃべりを続けたりすることもある。講義外や学期終了後もパートナーと連絡を取り合う学生もいる。

6. 参考文献

岩崎克己：「日本のドイツ語教育と CALL ーその多様性と可能性ー」

三修社 2010 年 5 月

吉井巧一：「新しいドイツ語教育と CALL について」『仲井間憲児選暦記念論文集』琉球大学ドイツ語研究室 1999 年 12 月

Ibd. : “Elektronisches Deutschlernen” Iudicium-Verlag, München
『Herausforderung und Chance –Krisenbewältigung im Fach
Deutsch als Fremdsprache in Japan』編著者：Rudorf Reinelt
u.a.m.2005年3月

吉田光演：「これからの CALL の問題点と展望」『広島外国語教育研究 1』
広島大学 1998 年 3 月

7. 資料

1. Skype-Partner :

Erste Runde(bis zum 8. Mai): “sich vorstellen und warum ich Germanistik/Japanologie studiere”

Sakurako – Alex + Vladislav

Koshi – Alina

Koki – Ava

Asuka – Jennifer

Yuka – Linda

Ayane – Lucas

2. 日本人学生の Skype 要約 (部分のみ) :

「Ich habe Skype mit Alex gemacht. Alex ist 24 Jahre alt. Er ist aus Mainleus gekommen, und er wohnt in Leipzig jetzt. Weil er interessiert an japanische und japanische Kultur haben, er studiert Japanisch seit acht monat. Er hat eine Katze im haus der Eltern. Sie heißt Cina. Er zeigte mir das Foto der Katze. Sie ist sehr süß!! Er hat viele Hobbys. Er programmiert gern insbesondere. Deshalb er will einen Job in der japanischen Computergesellschaft finden ...」

3. ドイツ人パートナーによる上記要約の添削：

「Ich habe mit Alex über Skype gesprochen. Er ist aus Mainleus gekommen und wohnt jetzt in Leipzig. Weil er an Japanisch und japanischer Kultur interessiert ist, studiert er seit acht Monaten Japanologie. Er hat eine Katze im Haus seiner Eltern. Sie heißt Sina. Er zeigte mir ein Foto der Katze. Sie ist sehr süß! Er hat viele Hobbys. Er programmiert insbesondere gern. Deshalb will er einen Job in einer japanischen Computerfirma finden...」

4. ドイツ人学生によるテーマ「Essen（食べ物）」に関する投稿：

「今日は皆さん
今週製法を書かなければなりませんから、肉巻きとゼンメル入りだんごを料理しました。沢山写真を撮りました。この料理はドイツでよく食べています。フランケンを知っていますか。お母さんの家はあそこにあります。フランケンバイエルン州の北にあります。あそこで肉巻きとゼンメル入りだんごをよく食べます。（写真多数、以下省略）」

日本人学生による「ネット上の難民に対するヘイトスピーチ」に関する記事の投稿：

「Wir haben einen Unterricht, bei dem wir Deutsche Artikel lesen und übersetzen. Das ist ein Artikel, den ich übersetzt habe. Deutsche Welle
Hass im Internet - Gewalt auf der Strasse - (以下省略)」

「ソーシャルネットワーク上で、特に難民に向けた攻撃的な発言が多くみられ、多くのユーザは攻撃的な言葉、侮辱する言葉を使用している。このことからドイツの法務大臣の Heiko Maas は facebook に対して以前から何度もヘイトスピーチに関する投稿の削除を要求していた。（以下、記事の翻訳）」

ドイツ人学生によるドイツの典型的なお菓子の紹介：

「みなさん こんにちは、私は あなたたちに すこし 'Storck' について話します。'Storck' は ドイツの会社で、お菓子をつくらっています。1903年に Wertherで この 会社は そうりつ されました。'nimm2'や 'Merci' や 'Toffifee'、 'Werther' s Original' の ような いろいろな製品を

うっています。(以下、ドイツのお菓子の紹介)」

付録：

「ビデオ会議システム」

メーカー：ソニー

型番：PCS-XG55

端末方式：H.323 および SIP

最大有効画素数：720p(1,280x720)

最大フレーム数：60

カメラ画素数：約 200 万画素

定価：730,000 円

その他詳細：

http://www.sony.jp/products/catalog/SPC_PCS-XG55.pdf

他大学・機関の多くはソニー製品ではなく、ポリコム社製品を使用している。基本的に他社製品同士でも通信はできるが、望むらくは同一メーカーの製品が良い。世界的なシェアを考慮すると、新規購入はポリコム社のものが良いかもしれない。

<https://www.vtv.co.jp/product/polycom/index.html>

【備考】

- * 通信にはグローバル IP アドレスが必要。
- * 国によっては制限のため通信できない場合もある（中国等）。

8. Zusammenfassung

Durch ICT(Facebook,Skype,Videochat usw.) Fremdsprachen lernen Ein praktisches Referat

Koichi Yoshii

Hier wird der Tandem-Unterricht zwischen zwei Universitäten in Japan und in Deutschland vorgestellt. Zwei Gruppen von Studenten, die auf der einen Seite an der Ryukyu-Universität in Okinawa Germanistik und auf der anderen Seite an der Universität Düsseldorf/Leipzig Japanologie studieren, lernen und lehren gleichzeitig und gegenseitig als Tandempartner Deutsch bzw. Japanisch als Fremdsprache. Sie lernen andere Kulturen, z.B. Geschichte, Alltagsleben, Mode, Freizeit und Sehenswürdigkeiten usw. des Partnerlands kennen – und auch manchmal die des eigenen Landes. Dabei benutzt man nicht nur sprachliche Mittel, sondern auch ICT-Techniken wie Facebook, Skype oder Videochat, wobei trotz der Zeitunterschiede und Entfernungen frei und beliebig Meinungen, Fragen bzw. Kommentare ausgetauscht werden können. Beide Lehrer unterstützen alle Phasen des Lernens, spielen aber keineswegs die Rolle von Unterrichtenden im allgemeinen Fremdsprachenunterricht, sondern nur die von sog. Organisatoren, um sich möglichst reibungslos zu kommunizieren. Das Verfahren und die Methodik und Didaktik werden mit konkreten Beispielen erwähnt, damit alle Interessenten für Fremdsprachenunterricht, oder auch für interkulturelle Kommunikation einige Hinweise dazu erhalten können.

Es wäre mir eine große Freude, wenn das Referat einen Anlass zur aktiven Diskussion und zum Informationsaustausch unter Fremdsprachenlehrern geben könnte.